

蘇芳集



茉莉花

高橋 さえ子

青いぎんなん

青山

丈

茉莉花に覚めて安静時間かな

まぼろしの船笛近し沖繩忌

大川へ出でて鬼灯市の宵

山水の湧きては暗む著莪の花

月光のかをり立ちたる葉鶏頭

木と和紙の住処銀木犀匂ふ

青水輪ひろげて盆の休みかな

二三日前よりずつと柿青し

梅雨雀は小雀にして雨を飛ぶ

雨上がる気配の影をあめんぼう

大学の片蔭通るたび長し

青いぎんなん住職がやあーと言ふ

みんなの後みんなの来て鳴けり

日の落ちるところから剥いて衣被

黙 禱 真保 喜代子

岩清水 長沼 三津夫

サーファーもライダーも行く浜通り
炎天や病めばいつもの道遠し
何となく空見上げたる終戦日
黙 禱 の 永 ぎ 一 分 終 戦 日
夕立来る匂ひのなかに草の香も
本降りや雨の似合はぬ猫じやらし
盆歌のいつしか止みて夜の静寂

夏 至 富田 正吉

正 門 野路 斉子

鉛筆も万年筆も梅雨に入る
太宰忌の朝刊濡れて届きけり
泰山木の花は師の花父の花
傾斜地の紫陽花ざつと見てゆけり
梅雨さむし人形焼を買うてやろ
紫陽花を褒めるにはよき小声かな
生れし日の夏至の地下鉄よく揺れる

秋風の仔細見えゐて硝子窓
秋日濃き森は大樹の共同体
樹々団欒木の実あらかた落ち尽くし
小鳥来るいま描かれたやうな眼よ
蟬宙に転んでしまふ樹がなくて
石堀で困ふ夜蟬の鳴く森を
芋虫に正門と云ふ出入口

みたび仰ぎ

前田 陶代子

深みゆく夏や鉄路の鉄のいろ
人ごゑのまぶしく過ぎぬ額の花
父の忌の霽れて泰山木の花
夏負けや紅き木の花遠に見て
ジギタリスわれにもありぬ向き不向き
巴里祭すこし緩めのものを着て
みたび仰ぎて梅雨月を近くしぬ

巴里祭

宮尾 直美

七月のどの木にも吹く海の風
揺れてよき蛭袋も月影も
噴水の精一杯といふ高さ
お四国の巡礼宿の巢立鳥
海の上が一番星や巴里祭
ダイバーは東京言葉雲の峰
父母あらずあらず夏樹の天へ伸ぶ

露 草

八木下 末黒

露の世の梅雨のさなかの墓まいり
師の墓や夏うぐひすの遠くより
鎌倉や梅雨の晴間の鳶上がる
極楽寺門前に買ふアロハシャツ
鎌倉の火もしごろの露台かな
蕎麦すすする露台の卓に雀くる
先生の墓の後ろの露草よ

師の墓前

吉田 幸敏

白百合を供花とし参る師の墓前
ほととぎす師の墓前にて待ちあはす
新盆や連衆つどふ師の墓前
先生の長き不在や蠅螂生る
蠅螂の子がむくむくと師の墓前
師の墓の裏へとまはるうつし草
あきあかね数へてあとは師の墓前